

Mind とは何か？ デューイの形而上学をめぐって

長谷 瑞光（調布アカデミー愛とぴあ 会員）

本発表では、デューイの『経験と自然』の第6章 (Nature, Mind and the Subject)、第7章 (Nature, Life and Body-Mind) 及び第8章 (Existence, Ideas and Consciousness) を主な分析の対象として、デューイにおける mind の概念について、デューイ自身の使用する soul や spirit や consciousness との違いも意識しつつ、以下のような角度から章ごとに順を追って、分析したい。デューイは、第5章 (Nature, Communication and Meaning) で、動物に見られる信号行為 (signaling act) が、人間においては、言語を用いたコミュニケーションの共同性となると分析し、ここからさらに第6章では社会性や個人 (individual) という視点からも、mind とは何かということを考察している。

「個人化されたものとして mind は、ただその「変化」(variation)が社会的であったときのみ、軽蔑的ではない意味で認識されるのであり、より大規模な社会的安全と充溢を発生させる際に有効化される。このことは、社会的関係が異種的 (heterogeneous) ものでありかつ拡張的であるときのみ、そして先導するものに対する要求や発明や変化に対する要求が固執や一致に対する要求を凌ぐときにおいてのみ、可能なのである」(LW1.p.167)。

ここには社会的ダーウィニズムを基盤とした個と社会のダイナミックな力動的関係に対するデューイの分析がみられる。個の側は社会的に承認されなければ、結局のその個体を維持し保存できない。他方、社会はただ同一性だけの原理で保持されているものではない。それは異種的な側面や拡張的な面を持っているのである。だからこそ人間社会は進歩し、変化してきた。この分析は結局、mind を個性の観点から分析することである。

ではデューイはなぜ、mind という表現を主に用い、「魂」(soul)、spirit という表現をあまり用いなかったのか？ デューイは「魂」や spirit についても、『経験と自然』の中で触れているが、ごくわずかな言及にとどまる。デューイは人間の死後、mind がどうなるか明確には論じていないように思われる。機能主義的に精神と社会、共同体の関係については、上述の引用が示唆するように、一応、論じているが、個々の人間の死について、あるいは逆に、かりに魂の不死性があるとして死後の「精神」(mind)のゆくえについては、明確な答えはない。第7章 (Nature, Life and Body-Mind) が、生命 (life) と身心 (Body-Mind) を併記しているのは、生命と身心という形での問題設定が、mind の問題を解明する一つの手がかりとなっているからであるといえる。

ところで Frederick J.E. Woodbridge は、デューイの『経験と自然』(1925年)の1年後、*The Realm of Mind, An Essay in Metaphysics* (1926年)を出版した。巻頭にはアリストテレスの『魂について』(431.b.20)とスピノザの『エチカ』

(Lib. II. Ax 2.)からの引用がある。ウッドブリッジは同書の中で、デューイの『経験と自然』については何も触れていない。しかしデューイは自らへのウッドブリッジの哲学への影響を認めていた。それは1905年の出会いにさかのぼれるという。『経験と自然』の時期には、デューイはウッドブリッジの思索の影響下だったと推定される（ここで確認したい）。

ウッドブリッジは、*The Realm of Mind*の中で、「存在」(Being)という言葉を変重要な言葉として使う。対するデューイにおいては、「存在」(existence)が、重要な言葉として『経験と自然』では用いられる。第2章 (Existence as Precarious and Stable) や、第8章 (Existence, Ideas and Consciousness) がその例としてあげられよう。

「存在」(being)が、時に超越的な神の領域の存在 (Being) までをも、イメージする (imago dei) であるのに比して、存在 (existence) は、デューイの哲学においては、過去の歴史を含めた日常の現実生活の中においてある「存在」である。基本的には自然主義的で人間主義的な文脈から、「存在」は不安定 (precarious) かつ安定 (stable) なものとして、経験されるものであり、また無意識なものではなく、意識的なものとして捉えられるものである。意識的なものとは何か？ デューイ哲学の中では、それはやはり、十分に目覚めていることを意味するのであろうか？

デューイは『経験と自然』の第7章の終わりと第8章のはじめに、F.M. Alexander の *Man's Supreme Inheritance*. New York: E. P. Dutton and Co., 1918. と、*Constructive Conscious Control of the Individual*. New York: E. P. Dutton and Co., 1923. への言及する。デューイは Alexander の著作に序文を書き、その重要性を強調している。アレクサンダー・テクニクの技法に拠れば、人間の意識は、身体を歪めて意識していることがある。実際、我々は身体の機能の全てについて充分、意識的ではない。我々は身体の全て、例えば内臓の動き、脳の動き、身体の姿勢について充分意識的ではない。デューイがアレクサンダーのレッスンを受けたのは、彼が体調を崩したからであるが、それによってデューイはこの問題について十分に意識するようになったのである。

以上、デューイの mind をめぐる問題連関を描き出すことを試みた。精神 (= 心?) とは何かという問題、いわば心身問題は哲学的に難問であり、単純かつ鮮やかな解答が安易に得られる性質のものではない。我々がここで問題にし確認すべきは、デューイの思考展開のプロセスである。従来の研究ではその基本作業すら充分になされずに、デューイの自然主義的かつ経験主義的な哲学思想の研究が、デューイ自身の思索とは別の方向へと推進されてきたように思われる。確かにデューイは、自然主義というスタンスをとったが、それは自然の中の物事や題材や精神それ自身がすでに全て完全に解明されているというスタンス、また全てのもものが透徹した形で完全に意識的ないし社会的に解明され自覚されているというスタ

ンスをとっていない。以上のように、本発表ではデューイの思索が展開される範囲を確認し、**mind** をめぐる今日的課題についても思いを巡らしつつ、**mind** とは何かについて、考察をしたい。